
あなたのために

トト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたのために

【Nコード】

N4897P

【作者名】

トト

【あらすじ】

たとえ仮初の日常だろうと、そこにある笑顔を守るために、非日常に刃を剥く。

霊素と呼ばれる物質が発見された世界。世界中のどこにでも存在し、従来のそれより優れた変換効率、且つクリーンなエネルギーはその文明を大いに発展させた。だがしかし、その恩恵には大きな代償が伴った。亡霊と呼ばれる脅威の出現。これは、人知れず亡霊と戦う少年達の物語

すば抜けた力を手に入れた主人公が大切な人達を守るために、
必要なものは力のほかに何があるのかを見つげながら成長していく。
そんな話になればいいなあ。

あゝ、じゃぞ口常っ。(前書き)

恥文をさらしに参りました。

あゝ、これぞ日常？

自分では、大切な人の涙を止めることも、拭うことも出来ない。

あの日そう思い知らされた俺は、せめてその涙を受け止められる
皿になろうと決めた。

俺は思う

あなたのために。

第一話『あゝ、これぞ日常』

「お……珠……お……！」

まどろみの世界。白く、優しい空気に満たされた海原で、俺は今
静かに瞳を閉じている。

誰かの声。岸边に俺をつなぎ止めるために放たれたロープ。でも、
今はそんなものは関係ない。そんなものでは俺の船出を止めること
など出来はしない！

さあ、憩うぜ！ 夢の世界で……

「起きやがれ！ 珠洲守！」

けたたましい怒声が耳に届くがはいか、ドンツと背中を強烈な衝撃が襲う。

なんてことだ、夢への航海がまさかドロップキックで阻まれようとは思ひもしなかった。しかも教師に。

「体育の授業中にまで居眠りこきやがるお前が信じらんねえよ！
それも直立不動でな！」

だが、俺はこんな事では挫けない。幸いなことに先程のキックのおかげでおあつらえ向き（うつぶせ）の体勢になった。これぞ順風満帆！

瞳よ、再び閉ざされよ！ 意識よ、俺をまたあの優しい世界へ連

……

「だから！ 寝るなっ！ つっ！ てんだろっが！！」

「ツツツツツ！！！！」

流れるような体捌きで足と首をきめられ、必死にタップする。俺には解る。この人本気で落しにきてる。

いや待てよ？ いっそのまま気を失ってしまえば俺の本願は達せられるんじゃない……

「勢ッ！」

もう意識を放り投げてしまつつもりの方に再び衝撃。今度は後頭部に唐竹割りですか……そうですか……。プロレス、好きなんですね。

「というかこれ、今日日すべて教育的指導で片付けられるものだろうか……」

「居眠りしようとするお前が悪い！」

……先生さつきから俺の頭の中覗いてません？

『次はタマ蹴り潰すぞ！』とおよそ教師の言葉とは思えない暴言を吐き捨て、先生は地を踏み付けながら去って行った。

とりあえずもうこの時間に眠るのは諦めよう。寝ようとしているのに疲れがどんどん溜まっていく。本末転倒もいいところだ。

だからといって思い切りいい汗をかくつもりなど毛頭ない。今日の科目はサッカー。誰が好き好んで球を追っかけ回すものか。そう、ボールは友達。俺には蹴り飛ばすことなど出来ない！

今からゴールキーパーの奴と代わってもらえないだろうか。開始前のポジション決めの際には満場一致で否決されたが、今から拝み倒せば代わってもらえるかもしれない。いや、代わってみせる！ 楽をするためなら多少の労力など厭わない。そのための行動力なら俺にはある！

そうと決まれば行動あるのみ。いざ、安息の地へ。

「藍、僕は君が本当にうらやましい……」

……出鼻を挫かれた。声のする方へ振り向けば奴がいる。サラサラヘアアの爽やか野郎。笑顔が素敵なナイスガイが、その笑顔を惜し気もなくこちらに向けていた。

何でだろう？ 寒気がする。

「ははは、無視かい？ 傷つくじゃないか、親友。興奮してしまうよ？」

説明しよう。今の一言で解るだろうが、こいつは女だろうが男だろうが、言葉でも物理的にも責められる事に快感を覚える生粋のマゾヒスト。その名は小早川 雅孝。

容姿は申し分なく、成績・運動ともに優秀。そのため非常にモテるが口を開けば誰もが凍る、残念な男だ。

「俺にとってはいつさい関わり合いたくない人間なだけだな、お前は」

「冷たいなあ。心地いいじゃないか。君はいつだってそうやって僕を悦ばせてくれる」

こいつの前では、沈黙は金どころの価値ではない。もうこいつの話しにまともな返事をするのはやめにしよう。そうしよう。てゆうかもつ無視しよう。

「それはさておき、話を戻そうか。僕は今、君に非常に嫉妬している」

でも、俺は知っている。この男にとって、無視されようが蔑ろにされようが、すべてプラスになってしまふ。駄目な向きにポジティブな、そんな男だということを。付き纏われたらもういるいる諦めるしかないということ。

「お前に嫉妬される覚えはないけど？」

「そうかい？ 本当にそう思うのかい？ ふふ、それとも僕の口から言わせるために焦らしているのかな？ ふふふ、いいよ、いい！
それでこそ藍！ 親友、いや、心の友！ 心友だ！」

「意味わからん。それと気色悪い。」

鳥肌が酷いです。身体の芯から寒くなってきました。誰か温かい毛布と健全な人間をください。大至急。

「さて冗談はさておき、本題に戻ろう。僕がいつているのはついさつきの事さ。君がああ姫ちゃんと仲よさ気にじゃれあっていたね！」

姫ちゃんって言うとおのり人すげえ怒るんだけどな。

俺にドロップキックをかました体育教師。姫ちゃんこと桜木 姫乃。もちろん女性だ。言葉遣いがあれでも女性だ。しかも美人だ。

乱暴だが生徒達に、特に女生徒からの人気が高く、また雅孝のよくな属性の者達からはそれを上回るほどの絶大な人気を誇る。

こいつらはもう彼女のファンだ。そのうちファンクラブとか創つてしまっくんじやないかと思うほどの。

というか、あの一方向的な攻撃をどうしたらじゃれているように思えるのだろうか？

「あまつさえ、あんなに密着して！ 足と首を責められながらも君は味わっていたはずだ！ 背中に感じる、あの豊かな双房の感触を！ まさに飴とムチ！ あれぞ極楽！ ああ、いけない。言葉にしたらあの光景がまざまざと目に浮かぶ……嫉妬に狂ってしまっしうだよ、藍！」

説明しよう。いや、もう説明する必要などあるまい。こいつ変態。超変態。

こいつ取り締まる法律とか出来ねえかな。

「体育教師。男勝りで美人で巨乳。よくある設定さ。だがテンプレートとは皆がそれを求めるが故にあるもの。皆のアイドル！ それを君はッ！」

「いや、ちよつと……」

拳を握り締めた手をワナワナと震わせて熱く弁をふるう雅孝。目が怖い。てゆうかこいつが怖い。

「君に独り占めなんてさせないよ。さあ教えてくれ！ 君の感想を！ あの快樂の心地を！ さあ、言ってごらん！ さあ！ さがブオオッ！」

「でけえ声で気色悪いんだよこのエロ河童ああ！！！」

……人間も飛ぶことが出来たんだね。まあ吹っ飛んだんだけど。

鼻息荒く俺に詰め寄って来た雅孝が、加速のついた先生のローリングソバットで宙を舞った。たぶん2メートルくらい。きっと交通事故ってこんな感じだろう。吹っ飛ばされた当人は悦に入った表情でノビてるけど。

呆然とそんな光景を眺めている俺を、先生がキツと睨みつける。

「お、おお前もあああいつみたいに思ってる訳じゃないだろうな

!？」

慌ててジャージの、その大きく膨らんだ胸元を隠しながら先生の顔、超真っ赤。

意外にも下ネタがだめなのか、自分がネタの話しだったからなのか。何れにせよ、この人にも乙女な部分があったんだな。

「な、何だ？ 人の顔をジロジロと……」

いけないいけない、この人すごい察しがいんだった。あまり失礼なこと考えていたら俺までぶっ飛ばされかねない。

「いえ、先生も可愛らしい所があるんだなって。いや、変な意味じゃなく素直に可愛いと思つてまズウツ!？」

「お前もかあッ！ 珠洲守いいい！」

ほ……本気で潰しにきやがったこの人……。真っ赤な顔して思いつきり蹴り上げてきやがった……。これ……。口から出てきたりしないよな……？

「たわけたことを言つてんじゃねえ！ このたらし野郎！」

口は災いの元ということか……。いや、俺変なこと言つてないよな？ 普通に褒めただけだよな？ あ、駄目だ。すげえ気持ち悪くなつてきた。本当に潰れてないよな、これ。

ズンズンと立ち去っていく先生には、地べたに転がり、股を押さえて悶絶する俺など見えてはいないのだろう。先生、せめて誰か呼んでてください。

「……し……尻もいい……」

向こうで倒れている変態から何か聞こえてきたが気にしない。て
ゆづかこいつもこのままくたばってくれればいいのに。

くっそう、さらに具合が悪くなってきた。

あゝ、これぞ日常？（後書き）

はい、しよっぱなからごめんなさい。

ド級の変態入りました。でも何故だろう。書いてて超楽しかった。

ドン引きした人この指止まれ。まだ見放さないでください、お願いします。これからもっとマシになっていきますから。

更新はなるべく早くします。では次回で！

あゝ、これぞ日常？

昼下がりの教室に終業のチャイムが鳴り響く。それでも机に突っ伏したままの俺。寝ている訳ではない。あのダメージが抜けていないのだ。股がまだ痛む……

「珠洲守起きてる？ ていうか起きろ」

いつそ今日はもう早退してしまおうかと考えていたら、隣の席からいきなり命令。

今は顔の向きを変えるのも億劫なんだけど、返事しないと実力行使でくるんだよこの子。どこかあの先生と通じるものがある。

「起きてるよ。どうした？」

「あら珍しい。て言うか顔色悪いんだけど大丈夫？ 体育終わってからあんたずっと具合悪そうなんだけど？」

彼女の方へ向きを変えた俺の顔を心配そうに覗き込んでくる藤咲さん。

確かに具合は良くないが、その原因を女の子に言える訳がない。

「そんなことないよ。いつも通り、眠いだけ」

「本当に？ 具合悪いんだったら隠さずに言いなさいよ？」

やっぱり優しいんだな、この子。俺には普段けっこう厳しいけど。

藤咲 奈津子。1年生から同じクラスで何故か席がニアミスすることが多く、そのつど授業中にたたき起こされたり、委員の仕事を半ば無理矢理手伝わされたりしてきた。俺ばっか。

でも周囲の人には、しつかり者で人当たりもよく優しいと評判だ。実際、俺もそう思う。普段けっこう厳しいけど。俺にばっか。

決して嫌われているわけではないはず。たぶん。いや、俺はそう信じてる。

「本当に何ともないよ。悪いね、心配させて」

「いや、あなたの心配ってゆうか今日の放課後の予定が心配なんだけど?」

……あ、そっち? いや、ってゆうか……

「放課後の予定?」

「へえ……今朝あなたに言ったけど? まさか覚えてないとか?」

ナニソレ!。やっべ、覚えてない、てか知らねえよ。

今朝? 何か言われたっけ? あ、いや? 何か話し掛けられてたか? うん、何か話してた! ……で何の話だよ! 覚えてどころか耳に入ってきてすらねえって! しょうがねえじゃん、朝だもん! 半分寝てんだもん! 低血圧だもん!

「とりあえず覚えてない、てことでオーケー?」

うへ。一人でテンパってたなら、この子超怒ってる。目が座ってる

ぜ。

いつも思うんだけど、藤咲さん俺に対しての沸点低くない？

「いや、放課後だろ？ 大丈夫」

「そう、大丈夫ね。で？ 何するんだっけ？」

墓穴っすか？ 何だか食いつきかたがはんぱねえっす。泣きたくなってきたっす。もうこれ正直に言ったほうがよくな？

「……悪い、本当のこと言えば、約束の内容が思い出せないんだ。ごめんな」

「つまり私との約束は別にどうでもよかったと。信じらんない」

泣くよー！？ もう俺泣いちゃうよ！？ 謝ったじゃん？ 確かに約束覚えてないとか最低だけど、俺ちゃんと謝ったじゃん！！ 逆に、こんだけ追い詰められるような約束、もう恐ろしくて知りたくねえよ！

「今日の放課後、わたしと藍くんとでなっちゃんの買い物を手伝って、てゆう話しじゃなかったかな？」

天の助け！ 我が危機を救う声の方へ見遣れば、黒髪ロングの美少女登場。この子天使だ。

いや、まで。約束ってそんだけ！？

「ちょっと、みやび。余計なこと言わないでよ」

「いやー、面白いから見てよと思ったんだけど、何だか可哀相になつてきちゃって」

……俺の責められている様はそんなに面白かったですか……そうですね。ガチでへこむよ？

でも、助けてくれた事にはかわりない。

「ありがとう、もう少しで泣きそうだったよ小早川さん」

「あんたはちょっと反省してなさい。あーあ、もう少しでこいつに何か奢らせてやれそうだったのに」

黒ーい。藤咲さんそんな薄ら暗いこと考えてたの？

「あはは、そんなこと言つて。なっちゃんさっきまでずっと藍君のこと心配してたじゃん」

「一応ね。体調不良の人間を連れ回して、こじらせでもしたら寝覚が悪いし」

何だかんだで心配はしてくれてたんだね。ありがとうございませう。でも、そんな視線を寄越されてもあんま高いものは奢れないからな？

「それより、藍くん。わたし苗字で呼ばれるの好きじゃないって言ったの忘れちゃったのかな？」

しまった、そうだった。

彼女が苗字を嫌がる理由。

小早川 雅。^{みやび} 悲劇的なことに、あのド変態と同じ苗字。しかも、それだけではない。神は、何故このような試練を彼女に与えたものか。雅孝と雅。二人は双子の兄妹なのだ。

共に美形で優秀というスーパー双子。兄である雅孝はそれを帳消しにしてしまうほどの変態だが、彼女は違う。きつと二物を与えた天が、代わりに生まれながらに苦難を授けたのだろう。身内の恥という。

「そうだったね、雅さん。うっかりしてた」

「さんってゆうのも他人行儀であまり好きじゃないんだけどな。ま、今は（・・・）それでもいいや。我慢してあげましょう」

あと、もう一つ。雅さんにはたぶん世界中でこの子しか出来ないであろう特技を持っているが、それはまた追い追ひ。

「……何か私だけ苗字で呼ばれるの納得いかない」

「はは、まあ仕方がないよ奈津子さん。藍はとてモシャイなんだ。僕だって名前で呼んでもらえるようになるまで随分と時間がかかったからね」

「……どっから沸いて来やがったこの変態。お前、クラス違うだろう。」

「それで、放課後だったかたかな？ どこまで買い物に行くんだい？」

ついて来る気か。別に構わないけど。っていうか、いつから聞いてたんだよ。

「もう、兄さん。もうすぐ予鈴も鳴るのにこんなところにいちや駄目じゃない」

天使の笑顔で雅孝をそう諭す雅さん。いつもより口調が穏やかなのは毎度のこと。

「それに、一秒でも長くここにいたら、それだけ兄さんの吐いた息がこの教室の空気に混ざっちゃうんだよ？人への迷惑っていうのちやんと考えて」

おお……相変わらずすごいな。周にいる何人かがこっち見て固まってるよ。

まあ、それもそうだろう。まさか雅さんの口からこんな辛辣な言葉が出てくるとは思いもしなかっただろう。

俺も初めて聞いた時は時間が止まった。

「……藍。実の妹からこう言われると、心が死にそうになるのは何故だろうね？」

知らねえよ。

そう、これこそが雅さんの特技。彼女だけが、この変態に精神的なダメージを与えられるただ一人の人物なのだ。すごいよ雅さん。

その後も雅さんの罵りの嵐にみるみるへこんでいく雅孝。予鈴とともに去っていく頃には、もはや死に体だった。

まあ、これもこの兄妹のスキンシップなんだろう。そうに違いはない。

その後、始業のチャイムが鳴り雅さんは自分の席へと戻った。やけにすつきりとした顔をしていたが、それは気づかなかつた事にした。たぶん、彼女はドSだ。

「ちて……」

旅に出るか。と、いつも通り眠りにつこうと思ったら、隣の席からすねを蹴られた。

あゝ、これぞ日常？（後書き）

一話目をよんでからこのかた、『あれ？こいつまさかもうバツクレやがったか？』と思われた方々。もしいましたら、もうしわけない。大変遅くなってしまいました。

物語を作ることとはかくも難しいことかと、今まさに感じているしだいであります。はい。

次話こそは…と息巻いていますが、どうなることやら…

いや、頑張れ俺！

こんな所まで読んでくださった方々ありがとうございました！

また次話にて相見えること、心待ちにしております！

＼＾Ｏ＾／

あゝ、「ねぞ日常？」

「足が痛くて歩きにくいのですが、藤咲さん？」

「そう。大変ね」

大変ですとも。

今日最後の授業中ずっと、寝ようと思えばすねを蹴られ、ちょっとでもぼおっとしようものならすねを蹴られ続けた。

ちょっと黒くなっただけど。ひどくない？

「いいじゃないか、藍。羨ましいよ。こんな美人に痛め付けられて、そのうえ一歩進むたびにその快感を思い出せるのだからね」

「そう？　ならわたしが兄さんに一生消えない引っかけ傷を付けてあげるね。ハートに」

「……あの、雅。いつも思うんだけど、僕をどうしたいのかな？」

「人格を矯正したいの」

どっという方向にだろうか……

放課後、雅さん達と合流した時に雅孝も自然と混ざり、結局4人で行動することになった。

道中、こんな感じで雅孝が何か言ったたびに雅さんからなかなか辛辣な毒を浴びせ掛けられている。まあ、雅孝はグツタリしてるけど、雅さんは何だか楽しそう、というより生き生きとしていてなによりだ。

「ちよつと、聞いてんの？」

二人を見ながらそんなことを考えていたら、隣を歩く藤咲さんがこつちを見ていた。

「ああ。卵焼きはきざみネギを入れると断然美味しく痛いッ！」

……ちよつとした冗談にも強烈なツツコミだぜ。すねのダメージがハンパない。

いやいや、藤咲さん、そんな不機嫌な顔していると将来シワが増え

「ふんっ！」

ゴスツ！ とさつきよりも強くすねを蹴飛ばされた。

……痛え……

「あんた今、何か失礼なこと考えてたでしょ？」

「……滅相もございません」

何故ばれるのか。そして、何故これほどまでに的確に同じ箇所を蹴り続けられるのか。

さては、実は人を痛め付けるのが趣

「た、たしか、弟君の誕生日プレゼントを皆で選ぶんだよね？ わかってる。わかってるかラァウチッ！！」

藤咲さんが攻撃体制に入ったので真面目に答えたが駄目だった……

「また何か変なこと考えてたら、次から道具使うから。」

だから何故以下同文。

……もう下らないことを考えるのはよそう……これ以上蹴られたら確実に明日にひびく。

「とりあえず商業区まで行くわよ。」

すねの様子を確認していたら藤咲さんに腕を取られ、半ば引きずられるような形で駅へと向かった。

ちなみに、駅といっても電車が行き来しているわけではない。

ともすれば巨大な体育館のように見えなくもない建物の内に、直径10メートル程の円盤の装置が5つ設置しており、その装置を覆う半球の淡い光の幕の内に足を踏み入れれば瞬時に目的の場所に移動できる。今や総人口1000万人を越えるこの大都市の重要な移動手段だ。

ただ、今だに地下鉄は主要交通機関として健在でその駅も多くあり、同じようなものだろうと便宜上駅と呼んでいるけど、実際は転送ターミナルといったところだろうか。

この都市にはこれから俺達が向かう商業区の他に、行政区、研究及工業団地、居住区、学園区の5つの地区があり、それぞれの地区のターミナルにそれぞれ5つずつ転送装置が設置してある。基本的にこの装置は二対一体で、1つの装置からはその片割れが設置してある場所とを往復することしか出来ない。しかし、規模にもよるがかなり距離が離れていても安全に転送することが出来る。都市間の移動はもとより、国家間の移動でさえこの装置で一飛びだ。もちろん、装置の規模は大きく異なるが。

すごい時代になったものだと思う。いや、まあ、前の時代なんて文献や映像でしか知らないけど。

それに伴い、都市と都市を結ぶ道路は次第に減っていき、非常に数本残っているだけで、その他は全て無くなった。市町村は徐々にひとつの都市へと合併され、今ではこの大陸に大小合わせて24の都市にまとまった。代わりに今まで道や市町村があった土地には合併に合わせて進められてきた再生事業により豊かな自然が広がっている。

そのため、業務用に使用許諾を得ていない自動車やバイクなどは、非常用の道路や運搬用の地下車道は文字通り非常時や特別に許可が無ければ通行することは許されず、また、都市内の路面ではタクシーやバスが走ってはいるが、それもそれぞれの地区毎で審査を通った業者や個人がその地区内でのみ運行が許されているだけで、個人的に乗りたいたいのなら郊外に設けられたサーキットやドライブが許された自然公園くらいでしか乗ることが出来ないため、公共交通機関や業務用車両を除けば完全に趣味の持ち物になった。

現在までに作られたさまざまな機械やほぼ全ての人々に普及して

いる携帯通信端末、果てはこの都市の総電力を担う発電施設までも
霊素からもたらされるエネルギーで稼働している。

霊素と呼ばれる物質。この物質の発見により文明はこれまでに異
常とも言える速度で発展して来た。

霊素によってもたらされた文明開化とも言える社会の進歩と繁栄
も然る事ながら、その物質を発見し、その後の発展の基となる装置
や機構を産み出したのが、一人の人物なのだから驚きだ。

なんでも、まだ霊素を発見するはよりも以前に、今ある技術の構
想を提言していたとか。

その当時は狂科学者だの空想論者だとか言われていたらしいが、
自ら霊素の存在を証明し、そして時代も明けた今では世紀の大天才
だの何だのと呼ばれて、教科書にも載っている。

しかし、若くして偉人と成った天才もすでに高齢になり、また、
手の平を返したような周り反応にうんざりしたのか、今ではどこか
に雲隠れしてしまい、たまに思い出した様にとんでもない研究成果
や発明を世に送り出しているらしい。

さて、今更ながら、何故俺はこんなどうでもいい物思いに更けて
いるのか。

答えは簡単だ。超暇。

目の前では女子二人が嬉々として服を選んでいる。

弟君の誕生日プレゼントはどうしたのかと言えば、そんなものは

商業区に着いて30分もしないうちに買い終わっている。

商業区に来たついでに自分達の欲しいものも見ていきたいと言
うので軽い気持ちで付き合う事にしたけど、長いなの。本当は
こちらの方がメインだったんじゃないかと疑いを禁じ得ないんだけ
ど、どうだろうか。

「ちょっと珠洲守、ブーツとしてないで次行くわよ次」

「ええ！？ もうここで三軒目だけど……まだ気に入ったもの見つ
からないの？」

「はいはいグダグダ言わない」

「だめだよ藍くん。付き合ってくれて言ったんだから、最後ま
で文句を言わずに付いて来ないと」

舐めてた、女の子の買い物舐めてた。

二人に引きずられて店を後にしながら、後悔という言葉を噛みし
めた。

ちなみに、二人に連れ去られながらも、助けを求めてチラッと雅
孝に目をやったら、死んだ魚のような目をして遠くを見ていた。

いや、どうした？

あゝ、これぞ日常？（後書き）

説明乙ツ！

何だか半分以上説明になってしまいました……（――；）

ていうか………

2ヶ月も更新滞って本当に申し訳ありません。しかも、まだ2話しか進んでないのに（…；）

只でさえ筆が遅いのに加えて、仕事やら何やらで多忙に次ぐ多忙で……いや、合間を見つけて話は書いてたんですけど……なかなか時間が……疲れも……

はいはい言い訳乙ツ！！

言い訳はこの辺にして、続きを待つていて下さった方、もしいましたら又しても遅くなり申し訳ありませんでした。また、ここまで読んで下さった方々、本当にありかとうございます！

こんなに更新の遅い作者ですが、次回も読んでいただければ幸いです。

でわ、またお目にかかるまで（＾・＾ノ

あゝ、これぞ日常？

この都市は行政区を中心に他の4つの区画が円形に囲むような形で出来ている。北側のほぼ半分を占める研究及工業団地、残る南側を東から居住区、学園区、商業区といった具合にだ。

その行政区のそのまた中心に、この都市のランドマークにもなっている最上部に大きな鐘が設けられた時計塔がある。この都市には高層建築物がごろごろと建っているが、この都市のそれぞれの主要道路は時計塔から都市外に向けてほぼ真っ直ぐに延びているため、どの区画からでもこの時計塔を望めるかたちになっている。

なかなか趣のある古めかしいデザインで、近年の建築技術や耐震技術の飛躍的な向上で『近代的』な建物が多くなってきた中、その物珍しさからこの都市の数少ない観光名所になっている。

そのため、本来観光客が見向きもしない行政区のその一画だけは、行楽の季節にもなればかなりの人が訪れ、時計塔を写真に収めたり、文字盤の下部に設けられた展望台から街並みやその夜景 特に北部に広がる工場群の外部電灯がきらびやかに灯されたその景色を眺めたりしている。

半分を研究施設や工場で占めるこの都市に普段から仕事目的以外で訪れる人などほほえないため、大型連休なんかになれば商業区から時計塔にかけてはお祭り騒ぎになる。それはもう、時計塔を望める道路を1本歩行者天国にして露天を並べたり、そこで色々なイベント催したり、あげく連休の期間中には連日花火まで打ち上げる始末だ。

このお祭り騒ぎもこの都市の名物で、また、時計塔の建築様式を真似た建物が並ぶこの区画の雰囲気も名物の一つに数えられている。

ただ、街中に何か他に名物があるかといえば、無い。

そもそも観光都市でもないこの都市にそうそう名所などは無い。

(他の都市の人からしたら珍しいものはあるかもしれないが)

強いて言えば、北区　この都市の住民は研究及工業団地のことをこう呼ぶ　にある展示場や見学の出来る工場内のオートメーションシステムくらいのもだろう。

この都市の名称は第一超大数集合都市『アマハラ』。一般的にはそのままアマハラと呼ばれているが、一部の人間には『第一研究都市』と呼ばれている。

一部の人間というのも、主に研究施設やそれに連なる機関に属する人たちだ。

研究及工業団地がこの都市の半分もを占める広大な敷地を有しているのにはそれなりの訳がある。単純に工場を建てるのに広い土地が必要だったこともあるが、霊素の研究やそれを用いた技術の開発を担う機関の総本山がこの都市にあるのだ。

『天原^{あまはら}霊素研究機構』。ややこしいし長いし面倒くさいので俺達は霊研と略して読んでるけど。

そして、この都市の北区まるまる一帯は天原霊素研究機構の本部だったりする。

アマハラという都市名もこの機構に由来するもので、そもそもからして、この都市自体がまず霊研ありきで造られた都市なのだ。

アマハラの北方には、『タカチホ山』と呼ばれるこの大陸最高峰の大山がそびえる。この山は大陸に5つある霊穴の一つで、その中でも最も多くの霊素が放出されている場所だ。

霊穴とは、世界中に満ち溢れている霊素が湧き出るところ。それは山や湖、何でもない平原だったりするが、そんな場所がこの大陸

中に5カ所ある。その中でも、この大陸のほぼ真ん中に位置し、最大の靈素発生地であるタカチホ山。その麓に天原靈素研究機構の前身となる研究施設を建てたのが、世紀の大天才・天原博士その人だ。その研究施設は次第に大きくなっていき、人が増えるにつれ住居や商店が建っていき一つの街となった。そして、国策による合併につぐ合併で、今の超大数都市へと膨れ上がっていった。

一つの研究施設から出来上がった都市、もつと言えば、一人の研究者によって生み出された都市。それがアマハラだ。

ハア……

何故俺は、再びこんなどうでもいい物思いに更けているのか。

答えは簡単だからあえて言わない。

あれからまた、さらに2軒店を回り、そして今何故か（・・・）最初の店に戻っている途中だ。

いや、うん……今までさんざん歩き回ったのは何だったんだろうね？ 付いてきた手前、グチを言っではいけないんだろうけど、気持ちはわかってくれるだろ？

「珠洲守、グズグズしない！ キビキビ歩く！」

今のこの疲労感について誰ともなしに同意を求めていたら、前を

歩く藤咲さんが歩くスピードを緩めて俺の隣に並び叱咤する。何だか、さっきの店で買いた物を済ませてから急にご機嫌斜めになってしまったんだけど、どうしたんだろ？ 今回は特に何か失礼なことを考えていた訳でもないし、何か粗相をしかした訳でもない…：なのにいつもと変わらない雰囲気からひしひしと伝わってくるその不機嫌オーラがそぞろ不安を催すのですが、藤咲さん？

「大丈夫だよ、藍くん。なっちゃん、べつに怒ってるわけじゃないから」

おっかなびつくり藤咲さんの後を歩いていたら、そんな俺の様子に気付いたのか、雅さんがフォローを入れてくれた。

不機嫌そうに歩く藤咲さんとは対照的に、雅さんの顔は晴れやかだ。それもそうだろう。さっきの店で、5軒目にしてようやく気に入ったのであろう物に巡り会えたのだから。

さっきの店での話だけど、5軒目というのと歩き疲れた事もあり、店内の隅に設置してあった椅子に腰掛けていたら、そこに両手に1つずつ何かのマスコットがぶら下げられたストラップを持った雅さんがやってきて、それを俺の顔の前に掲げて『どっちがわたしに似合うかな？』と聞いてきた。

何となく、というか直感で雅さんに似合いそうな方を選んでみたんだけど、何と云うかあっけなく、そして嬉しそうにそれをレジへと持っていき、そのまま会計を済ませてしまった。

ここに来るまでにさんざん決めあぐねていたのは何だったんだろうかと思っただけど、それもすぐに考え直した。

たぶん俺に決めさせるまでもなく、あの時点でもうどちらかは決めていたのだと思う。ただ、自分ではどっちか決めていても、その後押しを誰かにしてほしいと思うのは人の常で、それで、それを俺

に求めてきたんだろう。そして、たまたま、俺が雅さんの選んだのと同じ物を指した。自分の選んだ物に同意を得られれば気分も良くなるというもの。あのストラップを大切そうに手で包み嬉しそうな顔をしていた雅さんを思い出せば、まさにその通りだったのだろうと確信できる。

閑話休題。

すねているという言葉にいまいちピンとこずに小首を傾げる。そんな俺を、雅さんは少しこつまたような笑顔で見ていた。

「なっちゃんも、藍くんに何か選んでほしいんだよ」

はて？ ということは、最初に行った店に実は気に入った物があったという事だろうか？

「もう……まあ、今はわたしがなっちゃんの機嫌を治しておくから、お店に着いたらちゃんと選んであげてね？」

俺が何だか的外れのような気がする予想を立てていたら、しょうがないなー、といった感じで雅さんはそう言って、少し距離の開いてしまった藤咲さんの隣へと小走りで駆けていった。

うん、それは本当にありがたい。雅さんのこの優しさを無駄にしては駄目だよな。俺も男の端くれだ！ ならば、もう一軒くらい気合いを入れて行ってやろうじゃないか！

「藍……ちよつといいかな……？」

……自分に活を入れようとしていたところに水を差される。声のした方へと振り向くと、相変わらず空気と化していた雅孝が、どん

よりと沈んだオーラを纏わせて佇んでいた。

「僕がここにいる意味は何かあるんだろうか？」

「無いからもう帰れ」

そもそも勝手についてきたんだろうが。しかも早々にドロップアウトしやがって。二人の相手をするの、実はちよっと……結構大変だったんだぞこんちくしょう。

「相変わらず冷たいね、藍。君の今のその言葉が、僕の心の中を心地のいい清風のように吹き抜けていったよ」

うおっ！ いきなり復活しやがった、こいつ！

「藍、もつとだ！ フッフ……まだ……こんなんじゃまだ足りないよ？ もっとゾクゾクする言葉を僕に浴びせかけておくれ！」

「よし、もうしゃべるな。通行人の皆さんがびっくりしてる」

辺りを見渡す。外見だけはすばらしく整っている雅孝の口から飛び出してきた言葉に、周りにいた人たち 特に少し離れた所から雅孝をちらちらと見ていた女性陣が、ぽかーん、と効果音の付きそうな表情でこちらを見ている。

しかし、そんな事で止まるような雅孝ではなかった……

「永久にその糞を垂れる口を閉ざせ。さもなくば死ぬ、だって？ おいおい君って奴は、どうしてこんなに僕の心を抉るような言葉が言えるんだい？ おかげで僕の心の底に溜まっていたヘドロのよう

な澱が綺麗に抉り取られてしまったよ！ 藍！ 君って奴は、本当に、最高の親友だよ！！」

何でこんなに全開なんだよこの変態！？ そんなで何だその都合のいいネガティブシンキングは！ どんな脳内変換してんだよ！！

「ああ……藍。僕は今、猛烈に興奮している……！！」

「やめるバカ寄るんじゃない！！」

ヤバい。こいつ目がヤバい！

「み、雅さんたすけ……」

助けを求めて前を歩いているはずの雅さんと藤咲さんに声をかけようとしたが、そこには誰もいない……

二人は俺達のいる所より遙か前を歩いていた。何だか歩くスピードがずいぶんと速くなっているのは気のせいだろうか……

いやいやいやいや！ ここにきて逃走とかッ……！！

「ほづら、藍。いいんだよ？ 遠慮しなくたって。君の思うままに、思う存分に僕を罵ってくれ。さあ！ さあッ！」

誰か助けて！ 本当に誰か助けて下さいッ ……！！

まあ……こんな状態になっている人間に近づこうとする人などいるわけもなく、俺が我慢の限界を迎えて雅孝を殴り倒した頃には、俺達の周囲には誰も寄りつかない空間が出来上がっていた……

街中の路上にポツンと一人佇む俺。その足下には、満足げな顔で
大の字で空を仰ぐ変態。

もう泣いていいかな……？

「終わった？」

この後どうしようかと考えていたら藤咲さんと雅さんが戻ってきた。ていうか、このタイミングで戻ってくるとか、君ら遠巻きに一部始終見てたでしょ……

「まったく、こんな街中で恥ずかしい真似しないでくれる？　しかも結構な時間無駄にしちゃったじゃない」

うん、そう思うならもっと早くに戻ってきてくれてもよかったんじゃないかな？

「……いろいろ言いたいこともあるけど、とりあえずここから離れようか」

かなり注目を集めてしまったこの空間にこれ以上いるのはキツイのです。

そんなこんなで歩き出す俺達3人。とりあえず、目的地である最初の店へと歩を進めた。足下に転がっている粗大ゴミは無視の方向で。

あゝ、これぞ日常。まあ、普通とは少し違つかもしれないが、これが俺の、俺達の日常。

この二人にとってはどうか分からないけど、俺達にとっては何物にも代え難い、かけがえのないもの。いつまでもこんな時間が続けばいい、心からそう思う。

ゴォーン ゴォーン

そう、思ったからなのか。思ってしまった、からなのか。

ゴォーン ゴォーン

その鐘の音は何の前触れもなく、俺達の日常の終わりを告げた…
…

あゝ、これぞ日常？（後書き）

変態、再び。でも書いてて相変わらず楽しくなってしまうのはどうしたものだろうか、はなはだ自分を心配に思うし、はい。

ドンマイ！ 自分！

ここまで読んで下さった方々、本当にありがとうございます。次回から非日常パートに入ります。

では、また次回で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4897p/>

あなたのために

2011年10月7日15時27分発行